

「又、そんな事を仰しやる」

「サア行こう〜」

「マアお待ちなされ、それから一寸貴方さんに云ふておかんならん事が御座ります、その御養子をお貰ひになるのは始めぢや御座りませんで」

「解つてるがな、娘が養子を貰ふたら、其の養子がコロツと死んだんやろ」

「死んだんと違ひます」

「そんなら二人目か」

「二人や三人ならよろしいが、一寸私が知つてるだけでも十八九人は變つてますねン」

「徳兵衛一寸待ちや、其の娘は歳は十八やと云ふたな」

「へイ、十八で」

「歳が十八で、養子が十八九人も變ると云ふのは、どう云ふ譯や」

「それが、其の養子が一晚と續かんのぞ」

「一晚も續かんと云ふのはおかしいな、其の娘さんと意氣が合はんとか、又母親と折合が悪いとか、家風に合はんとか、養子が放蕩を仕て半年と續かんと云ふのは世間にもよう有る事やが、一晚と續かんとは薩張り譯が解らんな」

「其處だす」

「何處や」

「其の娘さんに、一寸疵がおまんねん」

「イヤ解つてる、身代があつて別嬪で何から何迄揃ふて居て、養子が一晚も續かんののは、何か疵物やなかつたら、私の様な乞食にまで成つた者を、誰が養子に貰ふもんか、解つてるがな、寝たら身體が倍になるねやろ、寝肥りと云ふて……」

「そんなものや御座りまへん」

「ハ、ン、そんなら夜中に首が延びて行燈の中の油をベロ〜と嘗ると云ふ、ロク〜首か」

「イ、エ違ひます、三々九度のお盃が濟んでお寝みになると、夜中に嬢がムク〜と起き上り、婿さんの寢息を考へて四邊を見廻して、そつと寢床を抜け出して縁先の雨戸を開け、庭前へ出ると高塀を掻き登つて、裏の常念寺の墓地へ飛下りて石碑の間で夜中にバリ〜と云ふのは……」

「そらな、な、何んぢやいな、そ、そのバリ〜と云ふのは」

「其の音を聞くと御養子が吃驚りして、皆逃げて歸りなさるので」

「夜中に、女のバリ〜は感心せんな」

「貴方、バリ〜位いが怖うおますか」